

# 後沢道南遺跡・馬牛館跡

令和 5 年 3 月

宮城県教育委員会

# 後沢道南遺跡・馬牛館跡

## 序 文

東日本大震災発生から 10 年の節目を過ぎ、令和 3 年度以降の「第 2 期復興・創生期間」を迎えた現在、地域住民の間では、復興と歩調を合わせるように、色彩豊かな風土や地域の象徴たる文化財の保存・活用の取り組みへ向けた気運が高まっています。

文化財は、地域の先人たちの歩みが刻まれ、今日まで守り伝えられてきた国民共有の財産です。なかでも、土地との結びつきが強い埋蔵文化財は、各種開発行為により影響を受ける恐れがあることから、開発に際しては、埋蔵文化財の保存と事業の両立を図るよう十分な協議・調整を行うとともに、市町村教育委員会と協力しながら発掘調査を実施しています。

本書は、令和 2 年度・令和 4 年度に当教育委員会が国庫補助金を得て行った試掘調査・測量調査の成果を収録したものです。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、地元住民の皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

令和 5 年 3 月

宮城県教育委員会

教育長 伊東 昭代



## 例　　言

1. 本書は、宮城県が令和2年度・令和4年度の国庫補助金を得て、宮城県教育庁文化財課が実施した開発事業に係わる試掘調査・測量調査報告書である。
2. 試掘調査・測量調査は、宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財課が担当した。
3. 試掘調査・測量調査及び資料整理・報告書の作成に関しては、以下の機関から御指導・御協力を賜った（五十音順、敬称略）。

栗原市教育委員会　白石市教育委員会
4. 本書で掲載した遺跡位置図等の地形図は、国土地理院の地理院地図を使用して作成した。
5. 本書で使用した測量基準点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。なお、方位は座標北を表している。
6. 本書で使用した標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とする。
7. 本書で使用した遺構記号は、以下の通りである。

SI：竪穴建物跡 ST：墓跡 P：柱穴・ピット
8. 本書における土色の記述に当たっては、『新版標準土色帖 1994年版』（小山・竹原 1994）を使用した。
9. 本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て、下記のものが執筆・編集した。

後沢道南遺跡 矢内雅之〔現 多賀城跡調査研究所〕  
馬牛館跡 黒田智章（第1・3・4章） 村上景亮（第2章）
10. 調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

## 目　　次

### 令和2・4年度調査の概要

後沢道南遺跡	1
馬牛館跡	17
報告書抄録	29

## 令和2・4年度調査の概要



当教育委員会では、埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金を受けて、道路改良・工業団地造成事業等に係わる発掘調査を実施した。これらのうち、本書には令和2年度の後沢道南遺跡（栗原市）と令和4年度の馬牛館跡（白石市）の調査成果を収録している。以下、各遺跡の概要を述べる。

### 【後沢道南遺跡】

栗原市築館に所在する遺跡で、付近に所在する大天馬遺跡や後沢遺跡では、8世紀代の竪穴建物跡等が検出されている（宮城県教育委員会 2016a）。（仮称）栗原インターチェン

ジ整備事業に先立ち、計画地北西部の試掘調査を実施したところ、竪穴建物跡2棟、柱穴・ピット等を検出し、集落域の存在が明らかとなった。遺構検出箇所は後沢道南遺跡として新規登録され、令和3年度以降に本発掘調査を実施することとなった。

### 【馬牛館跡】

白石市斎川字館山に所在する中世の城館跡で、白石盆地の南端、狭隘な地形を押さえる交通の要衝に位置している。送電鉄塔建設工事を調査原因とする本発掘調査を契機とし、館跡の規模や構造を把握するため、地形測量調査を実施した。調査の結果、平場・土塁・堀などの地上遺在遺構を確認した。なお、発掘調査対象地は城館の遺構が広がる範囲の外側に位置すると考えられた。

# 後沢道南遺跡

## 調査要項

遺跡名：後沢道南遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 No. 41074） 遺跡略号：AUM

所在地：宮城県栗原市築館字萩沢後沢道南

調査原因：(仮称) 栗原インターチェンジ整備事業

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財課

調査期間：令和2年11月4日～12月4日

調査面積：2,821m<sup>2</sup>

調査協力：宮城県土木部北部土木事務所栗原地域事務所 栗原市教育委員会

調査員：傅田惠隆 矢内雅之

## 第1章 調査に至る経緯

宮城県北部に位置する栗原市・登米市においては、国道4号築館バイパスを起点として三陸自動車道登米インターチェンジ付近の登米市中田町浅水に至る、みやぎ県北高速幹線道路の建設が進められている。同幹線道路は総延長約24kmを4期に分割して整備するもので、3期の佐沼工区を除いた1・2・4期については既に供用が開始されている。このうち4期の築館工区においては、みやぎ県北高速幹線道路と東北自動車道の相互乗り入れを可能にするインターチェンジの新設が計画され、平成30年8月10日、これが許可された((仮称)栗原インターチェンジ整備事業)。

同整備事業は栗原市築館萩沢地内にランプや料金所、側道の設置等を計画するもので、事業計画地及びその周辺には、木戸遺跡・下萩沢遺跡・後沢遺跡・大天馬遺跡が分布する(第1図)。計画地内に周知の遺跡が存在することと未発見の遺跡が存在する可能性が高いことから、令和2年8月に宮城県教育庁文化財課(以下、当課)、栗原市教育委員会文化財保護課、北部土木事務所栗原地域事務所の三者で現地協議を実施した。その結果、計画地内においては工事に先立ち分布調査及び試掘・確認調査が必要との判断に至った。このうち、地権者の承諾が得られた計画地北西部においては同年10月23日に分布調査を実施し、遺物及び地上顕在構造は発見されなかった。一方で、遺跡外ではあるものの当該地には、遺構の分布が見込まれる平坦面及び緩斜面が広がる状況がみられた。そこで当該地を対象に、当課の国庫補助事業で遺跡の有無を把握するための試掘調査を実施することとした。

## 第2章 遺跡の概要

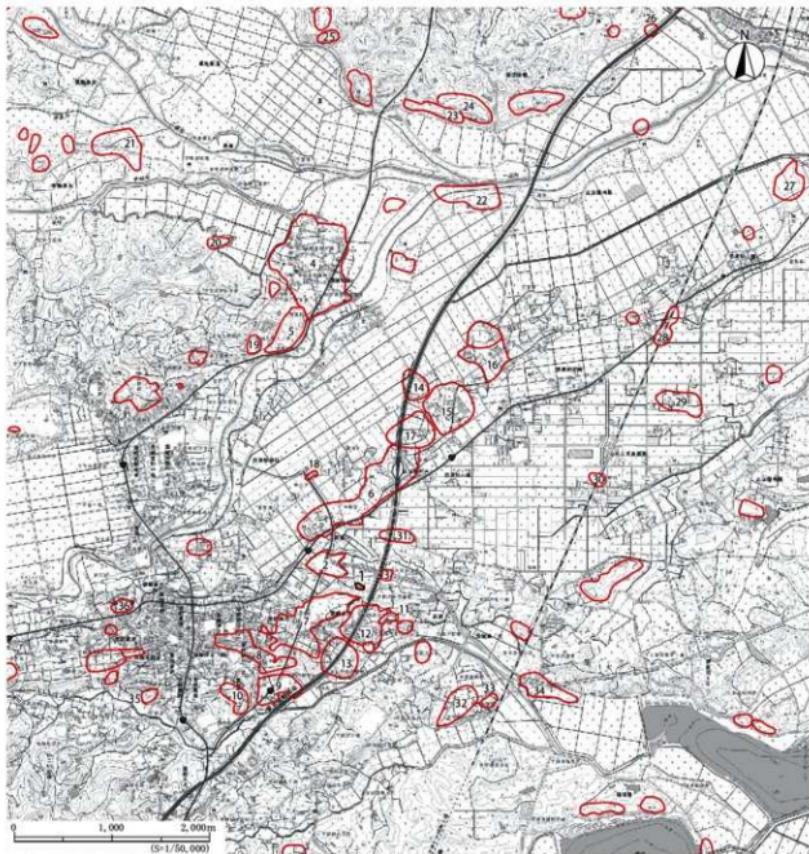
### 1. 地理的環境

後沢道南遺跡は宮城県栗原市築館字萩沢後沢に所在する。遺跡は築館市街中心部から北東に約2km離れた地点に位置している。遺跡周辺には、奥羽山脈から東方へ延びる陸前丘陵の一部である築館丘陵と、それにつながる沖積地(迫川低地)が広がっている。築館丘陵は奥羽山脈の東麓に源を発する迫川水系の河川によって複雑に開析されている。遺跡は迫川支流の大江堀川と荒川に南北を挟まれた丘陵の平坦部に立地し、丘陵北側と南側は急斜面となっている。現況は宅地、水田または休耕田などである。

### 2. 歴史的環境

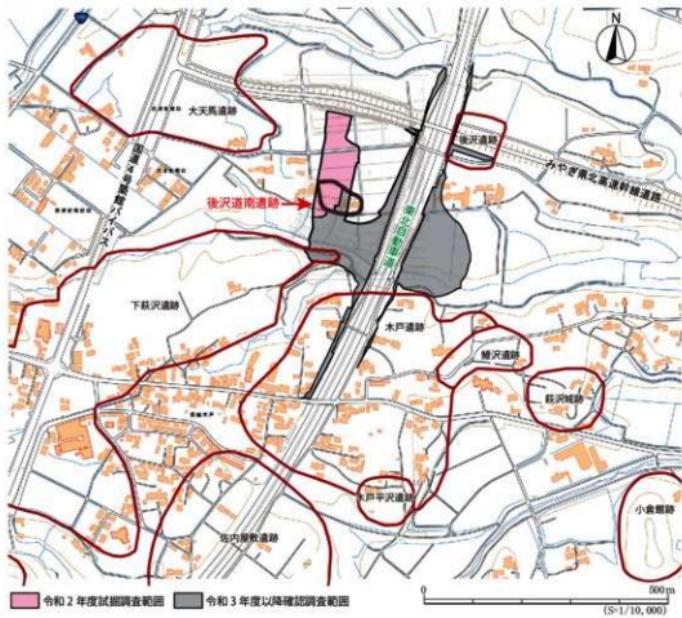
本遺跡の周辺には、旧石器時代から近世の遺跡が多数所在し、なかでも縄文時代と奈良・平安時代の遺跡が濃密に分布している。以下では、本遺跡に関連する縄文時代、弥生時代、古代、中世を中心とし、周辺の遺跡を概観する。

縄文時代の遺跡では、嘉賀貝塚(34)で縄文時代前期後葉～中期初頭(大木6～7a式)における環状集落の形成過程やその形態の一端が明らかとなつたほか、晚期後葉～弥生時代前期前葉の墓域も確認されている(築館町教育委員会2002・2003、宮城県教育委員会2003)。木戸遺跡(12)およ



番	遺跡名	立地	種別	時代	番	遺跡名	立地	種別	時代
1	後沢道南遺跡	丘陵	集落	古墳・近世	19	丘陵斜面	丘陵	古墳地	古墳地・古代
2	大矢戸遺跡	丘陵	集落	古代	20	丘陵斜面	丘陵斜面	散布地	闕文・古代
3	後沢遺跡	丘陵	集落	奈良・平安	21	丘陵原遺跡	丘陵	集落	古墳中・古代
4	史跡伊治城跡	段丘	集落・散在地	古平野・中世	22	丘陵斜面	自然堤防・散布地	闕文・古代	
5	史跡人の足遺跡	丘陵	集落	闕文・古墳・奈良・平安・中世	23	丘陵極六景跡	丘陵斜面	穀六景跡	古墳地
6	御殿空庭跡	丘陵	集落	古平野・桃文・奈良・古墳・近世	24	上御跡	丘陵	城郭	平安
7	下轟引遺跡	台地	散在地・集落	闕文・平安・中世	25	下轟引極六景跡	丘陵斜面	穀六景跡	古墳地・古代
8	原光遺跡	丘陵	集落	闕文・古代・中世・近世	26	芦野遺跡	丘陵	集落	奈引・古代
9	明山遺跡	丘陵	集落	闕文・古代	27	棘原遺跡	段丘	集落	奈引・奈良・平安
10	高山山遺跡	丘陵	散布地	闕文・古代	28	人門遺跡	段丘	集落	闕文・奈良・平安・中世
11	柳原遺跡	丘陵側	集落	闕文中・奈良・平安	29	熊谷遺跡	段丘	散布地・散布地	闕文期・古代・中世
12	K-3遺跡	丘陵	集落	闕文中・古代	30	熊谷跡	段丘	集落	闕文・古代
13	古内河牧遺跡	丘陵	集落	闕文中・奈引・奈良・平安	31	山ノ上遺跡	段丘	集落	闕文・古代
14	朝ノ丸遺跡	段丘	集落・集落	闕文・奈引・近世	32	照葉行遺跡	丘陵斜面・散布地	闕文中・奈引・古墳・古代	
15	吹付遺跡	段丘	集落	古代・中世	33	玉台丘遺跡	丘陵	散布地	闕文中・奈引・古代
16	足鹿跡	丘陵	散布地・集落	旧石器・古墳・奈良・平安・中世	34	足鹿貝塚	丘陵	貝塚・集落	闕文前・奈引・弥生・古代
17	宇治遺跡	丘陵	集落・城郭	闕文前・奈引・生糸・近世	35	小口遺跡	丘陵	散布地	闕文・古代
18	寺の沢遺跡	丘陵	散布地	古代	36	吉野遺跡	段丘	散布地	古墳中・古代・中世

第1図 後沢道南遺跡と周辺の遺跡



第2図 調査対象範囲

び佐内屋敷遺跡（13）では、縄文時代中期中葉（大木8式）の竪穴建物跡が検出されている（宮城県教育委員会1980c・1983）。鶴沢遺跡（11）では中期末（大木10式）の斜位土器埋設複式炉をもつ竪穴建物跡が確認されている（築館町教育委員会2005）。

弥生時代の遺跡としては、宇南遺跡（17）では弥生時代初頭及び後期の遺物が出土したほか、弥生時代後期の天王山式土器を埋設した壺棺墓が検出されている（宮城県教育委員会1979・1980d）。また、佐内屋敷遺跡（13）でも天王山式土器が出土している（宮城県教育委員会1983）。

古代（奈良・平安時代）の遺跡として代表的なものには、神護景雲元年（767）に营造された城柵官衙遺跡である、伊治城跡（4）がある（築館町教育委員会1988他）。同遺跡は正殿・前殿・北殿・脇殿が規則的に配置された政庁と、それを囲む内郭、外郭からなる三重構造城柵であることが判明している。また、国内初となる弩「機」の出土でも著名である。集落遺跡には大天馬遺跡（2）（宮城県教育委員会2012・2016a）・後沢遺跡（3）（宮城県教育委員会2016a）、下萩沢遺跡（7）（宮城県教育委員会2009、栗原市教育委員会2016）、原田遺跡（9）（宮城県教育委員会1980a・2009）、木戸遺跡（12）（宮城県教育委員会1980c）、山ノ上遺跡（31）（宮城県教育委員会1980b）、御駒堂遺跡（6）（宮城県教育委員会1982・2016b）、源光遺跡（8）（栗原市教育委員会2012、宮城県教育委員会2019）などがある。山ノ上・御駒堂遺跡は関東系土師器や関東型カマドが顕著に認められる

ことから、7世紀末～8世紀初頭にかけて坂東からの移民によって成立した集落と考えられている。原田・下萩沢遺跡は計画的な建物配置や円面硯・鉄製武器類の出土などから、律令政府の辺境政策のもとに営まれた集落と考えられている。また、8世紀後半に比定される焼失竪穴建物は『続日本紀』宝亀11年(780)の記事にみえる、伊治公哲麻呂の乱との関わりを窺わせる。

中近世の遺跡としては、原田遺跡(9)、木戸遺跡(12)、御駒堂遺跡(6)、宇南遺跡(17)、鶴ノ丸遺跡(14)などがあげられる。木戸遺跡では壁沿いに柱穴をもつ中世の竪穴遺構が発見されており、これと類似した遺構が原田遺跡・源光遺跡でも確認されている(宮城県教育委員会 1980c・2009・2019・2021)。宇南遺跡では中世の井戸跡、土坑が検出されている(宮城県教育委員会 1979)。鶴ノ丸遺跡では掘立柱建物跡、土塁跡、堀跡、竪穴遺構などが検出され、鎌倉時代後期～江戸時代の館跡と考えられている(宮城県教育委員会 1981)。

### 第3章 試掘調査の成果

#### 1. 調査の方法と経緯

試掘調査は令和2年11月4日から開始し、計画地内に合計69本のトレーナーを設定した(T1～T69:図2)。トレーナーは、長さ約5m～47m、幅約1.4～4m、深さ20cm～140cmである。表土掘削にはバックホー(0.45m<sup>3</sup>)を使用した。平面図(調査区)の記録にはトータルステーション及び電子平板システム(遺構くん)を用いた。その際に使用した基準点の座標は次の通りである。

TA10 : X= -140198.337 Y=18160.917 TA12 : X= -140176.532 Y=18105.233

TA14 : X= -140250.748 Y=18144.278 TA17 : X= -140279.287 Y=18092.941

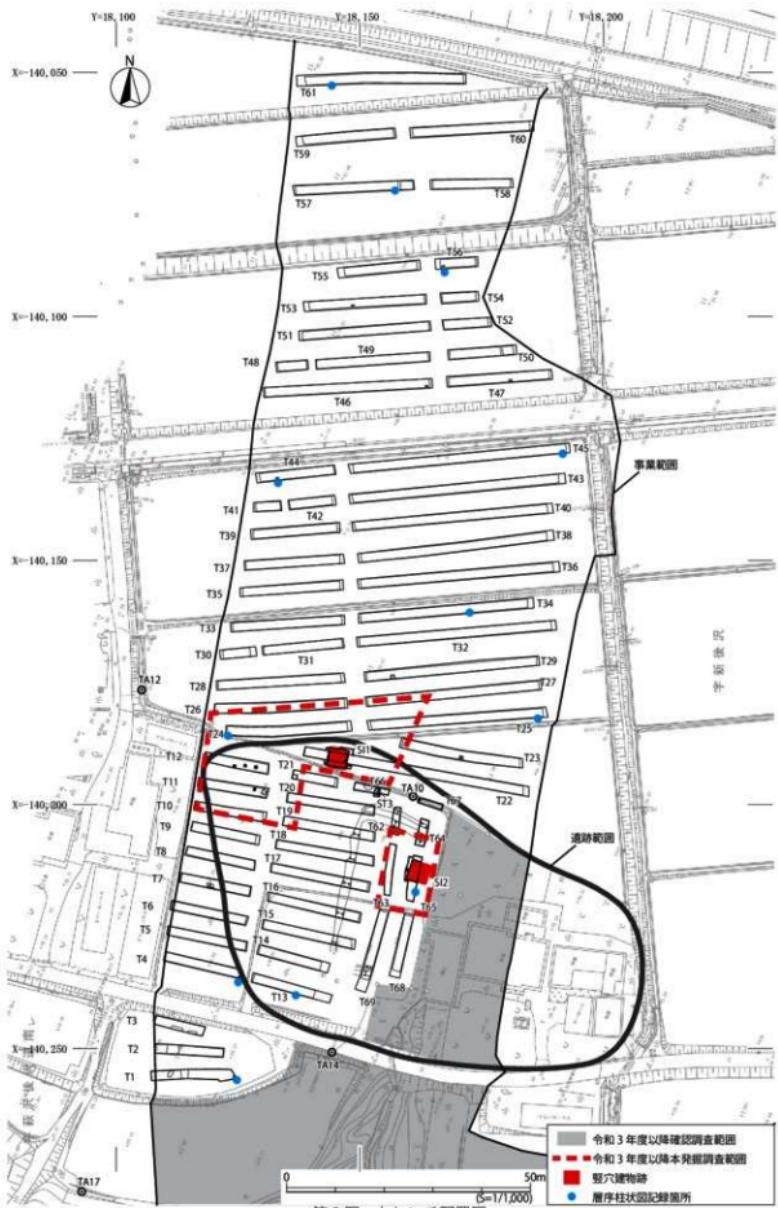
また、各調査トレーナーでは地層の柱状図(略図)を作成した。写真撮影には、一眼レフデジタルカメラ(Canon EOS 6D Mark II 2,620万画素)を使用した。

調査の結果、丘陵上平坦面において竪穴建物跡2棟、柱穴・ピット4個等の遺構を検出した。12月1日に市教育委員会、北部土木事務所栗原地域事務所に対して調査結果を報告するとともに、以後の対応について協議を行った。その際、インターチェンジの設計変更が困難であるため、遺構を検出した箇所については工事に先立ち本発掘調査が必要になることを確認し、了承を得た。その後、12月3日・4日に調査区を埋め戻し、試掘調査を終了した。

試掘調査以降の対応としては、遺構検出箇所周辺を後沢道南遺跡として遺跡台帳に新規登録し、令和3年度以降に事業地内の780m<sup>2</sup>を対象とする本発掘調査を実施する予定とした。あわせて、木戸・下萩沢・後沢遺跡・後沢道南遺跡の範囲内や隣接地の確認調査も令和3年度以降に実施することとした(第2・3図)。

#### 2. 基本層序

調査範囲は、南北を沢に挟まれた丘陵の平坦部に位置する。現況は水田または休耕田である。調査では第4図に示すI～XII層を確認した。I層はIa～Ifに細分でき、Ia・Ib・Ic層がそれぞれ現代の表土・盛土・水田耕作土にあたる。その下層のId～Ifは旧耕作土である。II層はこれ

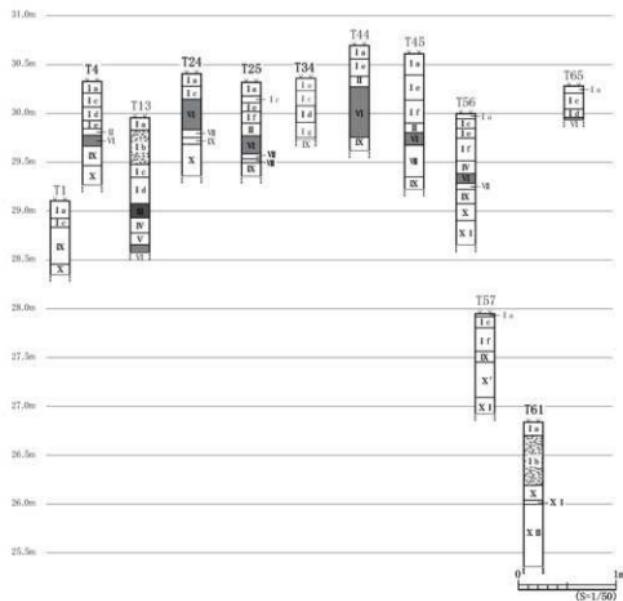


第3図 トレンチ配置図

らの耕作に起因する地山攪拌層である。Ⅲ層・IV層・V層はT13に残存し、Ⅲ層は旧表土、IV層とV層は地山との漸移層である。これより下のVI～XII層が地山であり、VI層（黄褐色シルト～粘土）、VII層（明黄褐色シルト）は標高が高い丘陵上平坦部（T4～T45）に広く分布する。その下層はIX層・XI層（灰白色粘土）とVIII層・XII層・XIII層の砂層が互層状に堆積している。

### 3. 発見された遺構と遺物

今回の試掘調査では、T22・T65で竪穴建物跡を各1棟、T11・T12で柱穴・ピットを計4個、T66で墓跡を1基検出した。竪穴建物跡は平面形の確認にとどめたが、その他の遺構は半裁を行った。



層	土色	土性	特徴
I a		表土。	
I b		表土。	
I c	暗オーブ網褐色 (2.5Y3/3)	シルト	現代水田耕作土。
I d	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	耕作土。
I e	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	水田耕作土。
I f	黒色 (10YR2/1)	シルト	耕作土。
II	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	φ 0.5～1cmの結核またはV形ブロックを多く含む。耕作による地山塊化。
III	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	旧表土。φ 0.5程度の炭化物を少許含む。241集の基本層IV。
IV	褐褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	豊富な結核や、豊富に混入。φ 0.2cm程度の地山塊を少許含む。1st 241集の基本層IV。
V	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト	豊富な結核の漸移層で、V層に似る。241集の基本層IV。
VI	黄褐色 (10YR5/8)	粘土質シルト～粘土	地山。1st 241集の基本層IV。
VII	明黄褐色 (10YR7/6)	粘土質シルト～砂質シルト	地山。1st 241集の基本層IV。
VIII	明色 (10YR4/4)	砂	地山。1st 241集の基本層IV。
IX	灰褐色 (10YR6/2)	粘土	地山。1st 241集の基本層IV。
X	褐色 (10YR4/4)	砂	地山。T57付近では灰黄褐色 (2.5Y7/2) 砂 (X' 層)
XI	灰白色 (10YR8/2)	粘土	地山。
XII	にへい黄褐色 (10YR5/3)	砂	地山。

第4図 基本層序

【SI1 竪穴建物跡】(第4図)

T22のVI層上面で検出した。規模は東西4.2m、南北3.8m以上で、平面形は隅丸長方形とみられる。方向は東辺でみると北で東に約12°偏している。東壁の南寄りにカマドが付設されており、長さ1.6mの煙道が建物外へ延びる。堆積土上層には10世紀前葉頃に降下したとされる十和田a火山灰の一次堆積が認められる。遺物は出土していない。

【SI2 竪穴建物跡】(第6図)

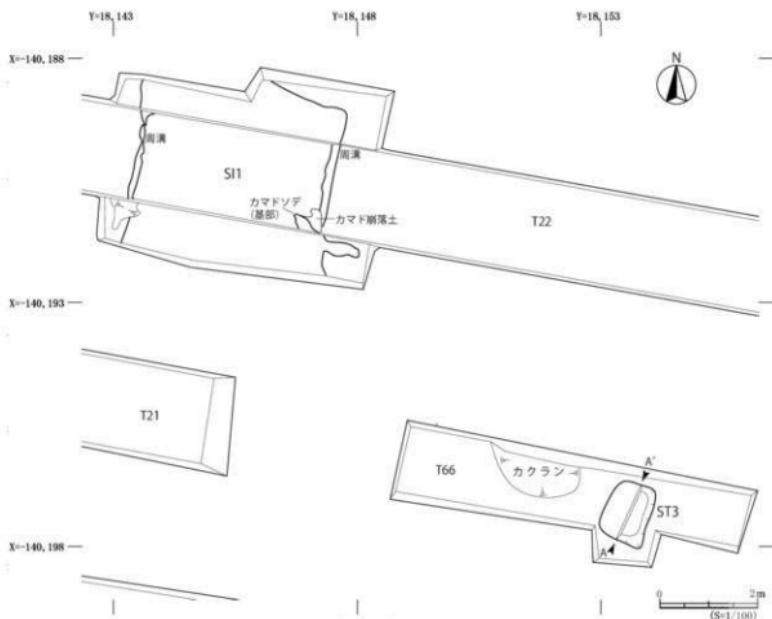
T65のVI層上面で検出した。規模は南北4.3m、東西2.2m以上で、平面形は隅丸長方形とみられる。方向は西辺でみると南で西に約19°偏している。西壁中央やや南寄りの位置でカマド煙道を確認している。堆積土上層には十和田a火山灰の一次堆積が認められる。

【柱穴・ピット】(第6図)

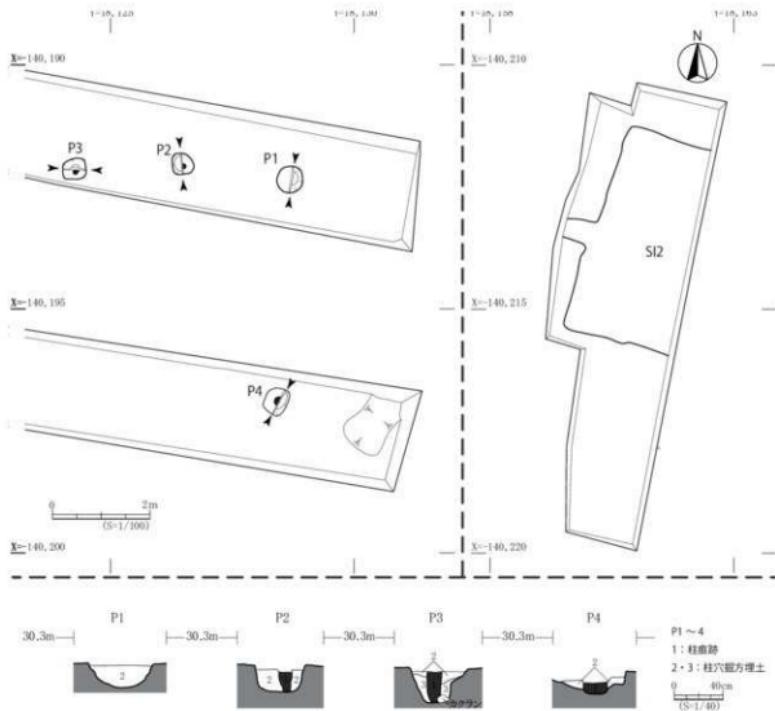
T11・T12では柱穴3個(P2～P4)とピット1個(P1)を検出した。検出面はVI層上面である。P2～P4はいずれも柱痕跡を伴い、規模・堆積土が類似する。柱穴の掘方は平面形が長径40～50cm、短径30～40cmの楕円形で、掘方埋土は地山(VI層)ブロックを含んだ黒褐色シルトである。

【ST3 墓跡】(第7図)

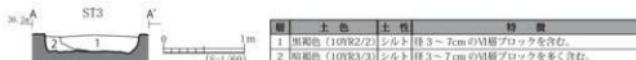
T66のⅢ層上面で検出した。平面形は長辺約1m、短辺約0.8mの隅丸方形である。堆積土は地山



第5図 SI1 竪穴建物跡、ST3 墓



第6図 SI2 竪穴建物跡、P1～4

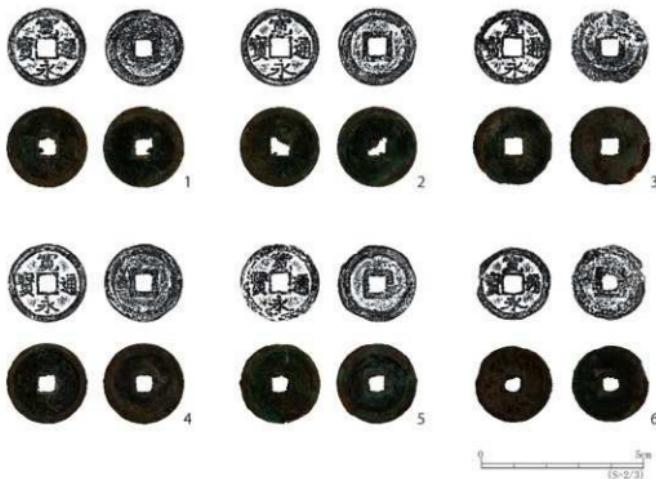


第7図 ST3 墓跡断面図

ブロックを含んだ黒褐色シルトである。底面直上の中央北寄りの位置から、棺の一部とみられる木製品の破片、及び六道銭の「寛永通宝」6枚が出土している（第8図）。

#### 【その他の出土遺物】（第9図）

このほか、T9付近で磨製石斧を1点表採した。T65ではSI2竪穴建物跡の直上を覆うI層（水田耕作土）より、土師器片が1点出土した。また、T4・T6・T7においてもI層や擾乱から縄文土器片や弥生土器片・土師器が少量出土した。



品番	種別	トレンチ/層	特徴	寸法
1	銭貨	SX3/底面直上	齊永通宝(古)。初陰年1630年。径2.5cm・孔径0.5cm・重さ2.55g	15
2	銭貨	SX3/底面直上	齊永通宝(古)。初陰年1630年。径2.5cm・孔径0.5cm・重さ2.53g	16
3	銭貨	SX3/底面直上	齊永通宝(古)。初陰年1630年。径2.4cm・孔径0.5cm・重さ1.74g	17
4	銭貨	SX3/底面直上	齊永通宝(古)。初陰年1630年。径2.5cm・孔径0.5cm・重さ3.31g	18
5	銭貨	SX3/底面直上	齊永通宝(古)。初陰年1630年。径2.5cm・孔径0.5cm・重さ4.07g	19
6	銭貨	SX3/底面直上	齊永通宝(古)。初陰年1630年。径2.4cm・孔径0.5cm・重さ2.07g	20

第8図 ST3 墓跡出土遺物



品番	種別	記述	特徴	寸法
1	石器	側面石斧 T9付近 / 表様	長165.0mm、幅45.8mm、厚110.5mm。重量97.88g。石材:珪化海麻岩。	23
2	陶文土器	深鉢?	T7 / カクラン 口縁部。LR織文(横位)の押立構造。	11
3	陶文土器	深鉢?	T4 / 1層 外側:RL織文。	3
4	陶生土器	不明?	T4 / 1層 外側:LR織文。	6
5	陶生土器	不明?	T4 / 1層 外側:LR織文。	24
6	陶生土器?	不明?	T13 / 1層 摩滅著しく調査不明。	22
7	陶生土器?	腹?	T6 / カクラン 底部。	7
8	土師器	腹?	T7 / カクラン 口縁部。内外面ヨコチザ。	9
9	土師器	腹?	T4 / 1層 側部。外側:ハケメ 内面:ヘラナデ。	1
10	土師器	腹?	T4 / 1層 側部。外側:ケズリ 内面:ヘラナデ。	2

第9図 遺構外出土遺物

## 第4章 総括

### 1. 遺構について

基本層Ⅲ層（旧表土）やIV・V層（漸移層）の残存がT13などの一部に限られることから、調査範囲内の旧地形は近現代の田面形成時に削平を受けていることが想定される。特に、T1～T3、T57～T61設定箇所では表土・盛土直下がIX層（灰白色粘土）・X層（褐色砂層）となっており、その箇所においては旧地形は大きく削平されている。ただし、丘陵上平坦面南寄りではVI層（黄褐色シルト・粘土）が広く残存しており、比較的旧地形をとどめていると想定される。

旧地形の残存が比較的良好な範囲内のT11・T12・T22・T65では、竪穴建物跡や柱穴等の遺構を検出した。2棟の竪穴建物跡の時期は遺物がほとんど出土していないが、十和田a火山灰の堆積状況から、いずれも10世紀前葉以前と判断される。T11・12で検出した柱穴も遺物から年代を特定することはできないが、P2～P4については掘方埋土の特徴が類似することからすべて同時代の柱穴とみられ、1棟の掘立柱建物を構成していた可能性がある。また、SI2竪穴建物跡の東側（未調査箇所）にも微高地が続く。今回の遺構の検出状況と地形観察から、この付近にも遺構が分布する可能性が高い。なお、ST3墓跡の規模や堆積土、出土遺物の特徴は、調査範囲北に所在する御駒堂遺跡で検出されている近世以降の墓に類似している（宮城県教育委員会1982・2016）。

### 2. 遺物について

今回の調査では縄文土器や弥生土器、土師器、石器等の遺物が少量出土しているが、これらはいずれも表採や耕作土（1層）・攤乱から出土したものである。このうち、第9図2の縄文土器は口縁部が波状を呈し、横位の押圧縄文が施されている。類似した土器が佐内屋敷遺跡の深鉢形土器第4a類に認められ、大木7b式（縄文時代中期前葉）に位置付けられている（宮城県教育委員会1983）。弥生土器・土師器は全体の器形が分かるものはないが、先述のように、当遺跡の周辺には古代の集落跡である大天馬・後沢・下萩沢遺跡（宮城県教育委員会2009・2012・2016a）や弥生時代後期の天王山式土器が出土した佐内屋敷・宇南遺跡（宮城県教育委員会1979・1980d・1983）などが所在する。今回の調査では縄文・弥生時代の遺構が検出されていないため、特にこれらの時代の遺物については耕作等により、上述の周辺遺跡や付近に存在する可能性のある未発見の遺跡等から流入したことが考えられる。

### 3.まとめ

調査の結果、竪穴建物跡2棟、時期不明の柱穴・ピット4個、近世墓1基を検出した。竪穴建物跡は灰白色火山灰の堆積状況から10世紀前葉以前の遺構とみられる。すなわち後沢道南遺跡は、大天馬遺跡と同一丘陵の東端部に位置し、周囲より一段高い舌状地形の突端部にあたる平坦面に古代の集落が広がり、集落を構成する竪穴建物はやや距離を保って散在する状況が認められた。

一方、隣接する大天馬遺跡、後沢遺跡、木戸遺跡、鰐沢遺跡に分布する8～9世紀の集落について、

堅穴建物は1棟、あるいは2～3棟が一つのまとまりとして構成され、後者は互いにやや距離を保って散在する状況が認められる（築館町教育委員会2005、宮城県教育委員会1980c・2012・2016a）。このような状況は、後沢道南遺跡の集落の時期や構成を検討する上で大いに注目される。さらに令和3年度以降は、令和2年度調査区の東と南の隣接地、後沢遺跡・木戸遺跡等でも調査が実施されることとなっている。各遺跡の集落の構成や分布、時期や消長等を明らかにし、各集落の特徴、相互の関連性、他の集落遺跡や古代城柵である伊治城との関連性などについてもさらなる検討を加えたい。

#### 引用・参考文献

- 栗原市教育委員会2006～2011、2013～2019『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第1、4、7、9、11、13、17、19、21、24、25集
- 栗原市教育委員会2012『源光遺跡』栗原市文化財調査報告書第15集
- 栗原市教育委員会2015『平成26年度 史跡伊治城・源光遺跡発掘調査の概要』『第41回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp.117-124 古代城柵官衙遺跡検討会
- 栗原市教育委員会2016『下萩沢遺跡』栗原市文化財調査報告書第20集
- 仙台市教育委員会1995『高棚遺跡』仙台市文化財調査報告書第190集
- 築館町教育委員会1988～2001、2004、2005『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第1～14、17、19集
- 築館町教育委員会2002『伊治城跡・嘉倉貝塚』築館町文化財調査報告書第15集
- 築館町教育委員会2003『嘉倉貝塚』築館町文化財調査報告書第16集
- 築館町教育委員会2005『般沢遺跡』築館町文化財調査報告書第18集
- 宮城県教育委員会1979『宇南遺跡』宮城県文化財調査報告書第59集
- 宮城県教育委員会1980a『原田遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第63集
- 宮城県教育委員会1980b『山ノ上遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集
- 宮城県教育委員会1980c『木戸遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第69集
- 宮城県教育委員会1980d『宇南遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第69集
- 宮城県教育委員会1981『鶴ノ丸遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅵ』宮城県文化財調査報告書第81集
- 宮城県教育委員会1982『御駒堂遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅶ』宮城県文化財調査報告書第83集
- 宮城県教育委員会1983『佐内屋敷遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ』宮城県文化財調査報告書第93集
- 宮城県教育委員会2003『嘉倉貝塚』宮城県文化財調査報告書第192集
- 宮城県教育委員会2009『原田・下萩沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第219集
- 宮城県教育委員会2012『大天馬遺跡』宮城県文化財調査報告書第231集
- 宮城県教育委員会2016a『大天馬遺跡・後沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第241集
- 宮城県教育委員会2016b『御駒堂遺跡・堂の沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第244集
- 宮城県教育委員会2016c『入の沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第246集
- 宮城県教育委員会2019『源光遺跡』宮城県文化財調査報告書第249集
- 宮城県教育委員会2021『源光遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第256集



1. 遺跡全景（南から）



2. 遺跡全景（東から）

#### 写真図版 1 後沢道南遺跡調査区



1. T1～3 全景（東から）



2. T22 全景（南西から）



3. T22 SI1 竪穴建物跡検出状況（北東から）



4. T65 SI2 竪穴建物跡検出状況（西から）



5. T12 全景（北東から）



6. T12 P1 断面（東から）



7. T12 P2 断面（西から）



8. T12 P3 断面（北から）

写真図版2 後沢道南遺跡試掘調査トレンチと検出遺構（1）



1. T11 P4 断面（東から）



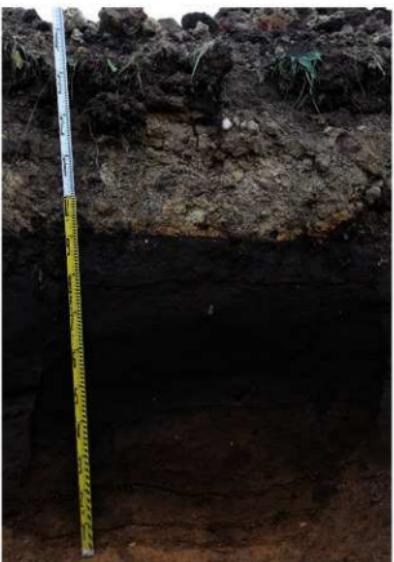
2. T66 全景（東から）



3. T66 SX3 墓跡断面（東から）



4. T16 全景（北東から）



5. T13 南壁断面（北から）



6. T24 全景（東から）



7. T24 南壁断面（北から）

写真図版3 後沢道南遺跡試掘調査トレンチと検出遺構（2）



1. T25 全景（西から）



2. T25 南壁断面（北から）



3. T36 全景（西から）



4. T44・45 全景（西から）



5. T44 南壁断面（北から）



6. T45 南壁断面（北から）



7. T56 南壁断面（北から）



8. T57～61 全景（西から）

写真図版4 後沢道南遺跡試掘調査トレンチ

# 馬牛館跡

## 調査要項

遺跡名：馬牛館跡（宮城県遺跡地名表登載番号 No.02170）遺跡略号：ABD

所在地：宮城県白石市斎川字館山

調査原因：遺跡範囲確認

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財課

調査期間：令和4年5月16日～26日、11月9日～29日

調査対象面積：約60,000m<sup>2</sup>

調査協力：白石市教育委員会

調査員：【宮城県】木村太一 黒田智章 佐々木翔太 高橋透 村上景亮

【白石市】石本弘 日下和寿 松田進

## 第1章 調査に至る経緯

馬牛館跡は、これまで地元研究者による略図等があるのみで、長く全体像が不明なままであった。令和4年度に実施される馬牛館跡北部の送電鉄塔建設工事に伴う本発掘調査を契機とし、馬牛館跡の規模や構造を把握するため、地形測量を実施することとなった。

## 第2章 遺跡の概要

### 1. 地理的環境

馬牛館跡は、宮城県白石市斎川字館山に所在する。白石市は宮城県南部に位置し、幅約3km程の白石盆地、越河小盆地が南北に連なり、その周縁を標高300m~700m程度の山地が囲んでいる。斎川地区は白石盆地の南端に位置しており、馬牛館跡は白石川支流の斎川右岸、最高所が標高192mの独立丘陵上に立地している（第1図）。遺跡の東側を国道4号と東北自動車道、西側をJR東北本線と東北新幹線が走っており、現代においても交通の要衝と言える場所に位置している。

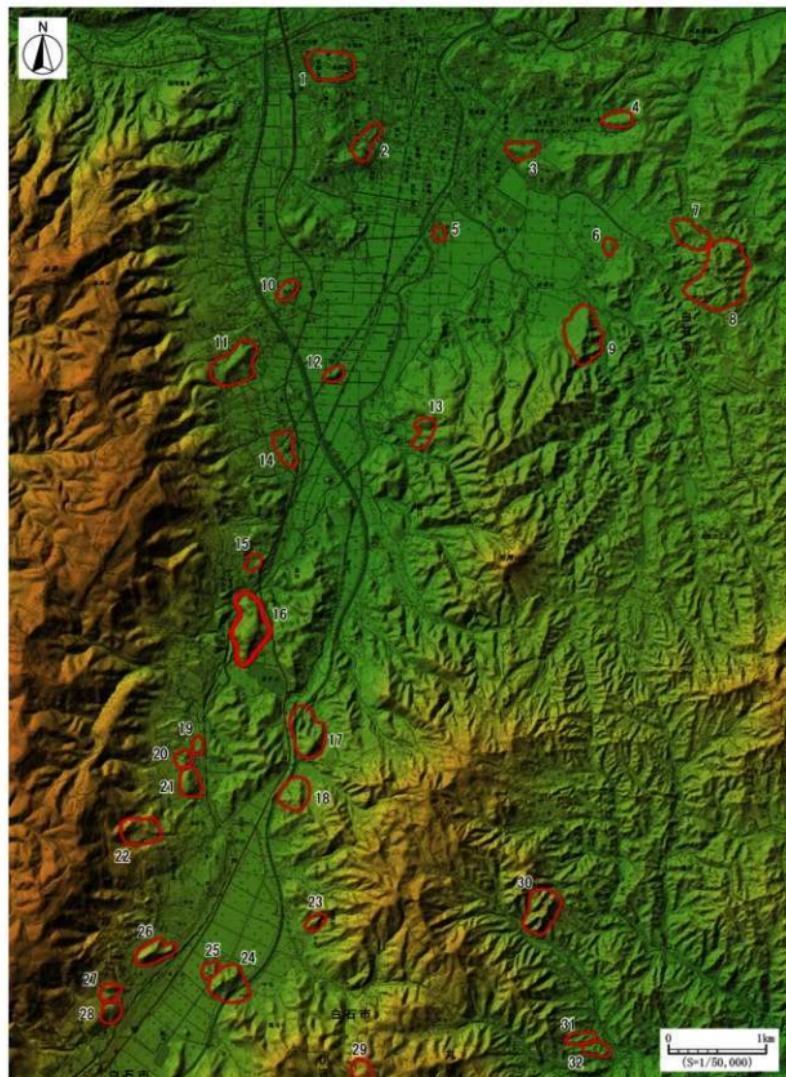


第1図 遺跡の位置

### 2. 歴史的環境

白石市内には旧石器時代から近世まで多くの遺跡が所在するが、ここでは馬牛館跡に関わる中世の歴史的環境をまとめる。中世の遺跡は86箇所登録されており、そのうち城館は58箇所とされている。その中で、飯詰館跡・湯ノ倉館跡・地蔵院館跡などで部分的に発掘調査が行われている（宮城県教育委員会 1980a・b・c）。また、白石市史編纂に伴い、三沢城跡・見明館跡などで地形測量・縄張図作成が行われ、中橋彰吾により多くの城館が市南部の越河・斎川地区に集中することなどが指摘されているほか（第2図）、城館跡を立地・構造などから分類し、各城館が機能した時期を考察する試みも行われている（中橋 1987）。松岡進は伊具郡の城館を検討する中で、三沢城・大町城跡などで縄張図を作成している（松岡 2002）。

周辺では、白石市と同じ刈田郡の七ヶ宿町で湯原城跡の測量調査・発掘調査が行われている。湯原城跡は近世前期成立とされる絵図が残されており、置賜地方へ通じる要路を押さえる境目の城である。発掘調査では二の丸東の小曲輪で掘立柱建物跡が検出され、16世紀前半を下限とする遺物が出土した。（湯原城跡発掘調査団 2018）。白石市の東隣、丸森町を含む伊具地域では、松岡進により多くの中世城館で縄張図が作成され、城郭プランの類型化、および連続虎口や多重横堀等の構造から伊達氏系城館の特徴に迫る研究などが行われている（松岡 1996・1998・2002・2015）。



- 1: 白石城跡 2: 新館跡 3: 三島館跡 4: 高野館跡 5: 田中理濱遺跡 6: 馬場館跡 7: 大町小館跡 8: 大町城跡  
 9: 三沢城跡 10: 太平館跡 11: 赤館跡 12: 施設館跡 13: 猿子館跡 14: 地藏院館跡 15: 御所館跡  
 16: 馬牛館跡 17: 太平館跡 18: 山道館跡 19: 乙森小屋館跡 20: 微妙館跡 21: 八幡台館跡 22: 鳥沢小屋館跡  
 23: 太斎館跡 24: 愛宕館跡 25: 笹森小屋館跡 26: 丑形山館跡 27: 十郎館跡 28: 別当館跡 29: 小屋館跡  
 30: 北山館跡 31: 小屋下館跡 32: 小坂館跡 (地理院地図の色別標高図に加筆)

第2図 馬牛館跡周辺の城館分布

### 3. 馬牛館跡の歴史

馬牛館跡については、近世以降の史料に記載が見られる。延宝年間(1673～1681)に作成された「仙臺領古城書立之覚」には、「右城主開基一切相知不申候是又戦國之時分往昔群主等住城之様子ニ相見得申候」とあり、城主等は不明としている。明和九年(1772)編纂の「封内風土記」には、「御館主桑折播磨守様御住居之由申伝候処右年代相知不申候當時ハ烟ニ罷成居候事」とあり、時期は不明であるが館主を桑折播磨守としている。明治十八年(1885)編纂の「磐城国刈田郡地誌」においても、「封内風土記」の記載を踏襲し、「桑折播磨ナル者居ル所ナリト云フ」とある。

馬牛館跡に関する先行研究として、紫桃正隆が踏査を元に規模や構造の大要を述べ、東側の曲輪下を大手口とする略図を作成している(紫桃 1973)。また、菊池利雄が丹念な踏査と地表面観察で各遺構の様子を略図に示しており、眼下に見下ろす街道を軍事的に抑える目的で築かれた城館と評価し、館主については天文年間に斎川郷を領した桑折氏と想定している(菊池 2000)。

## 第3章 調査成果

### 1. 調査の方法と経過

調査は宮城県教育委員会を主体とし、白石市教育委員会の協力を受けた。

地形測量図作成にはトータルステーション及び電子平板システム(CUBIC 社遺構くん cubic2022)を用いた。測量に際しては事業側が打設した基準点等を使用した。主な基準点は以下の通り。

R3K1 X=227,018.195 Y=-19,874.846 B1 X=-227,087.021 Y=-19,854.356

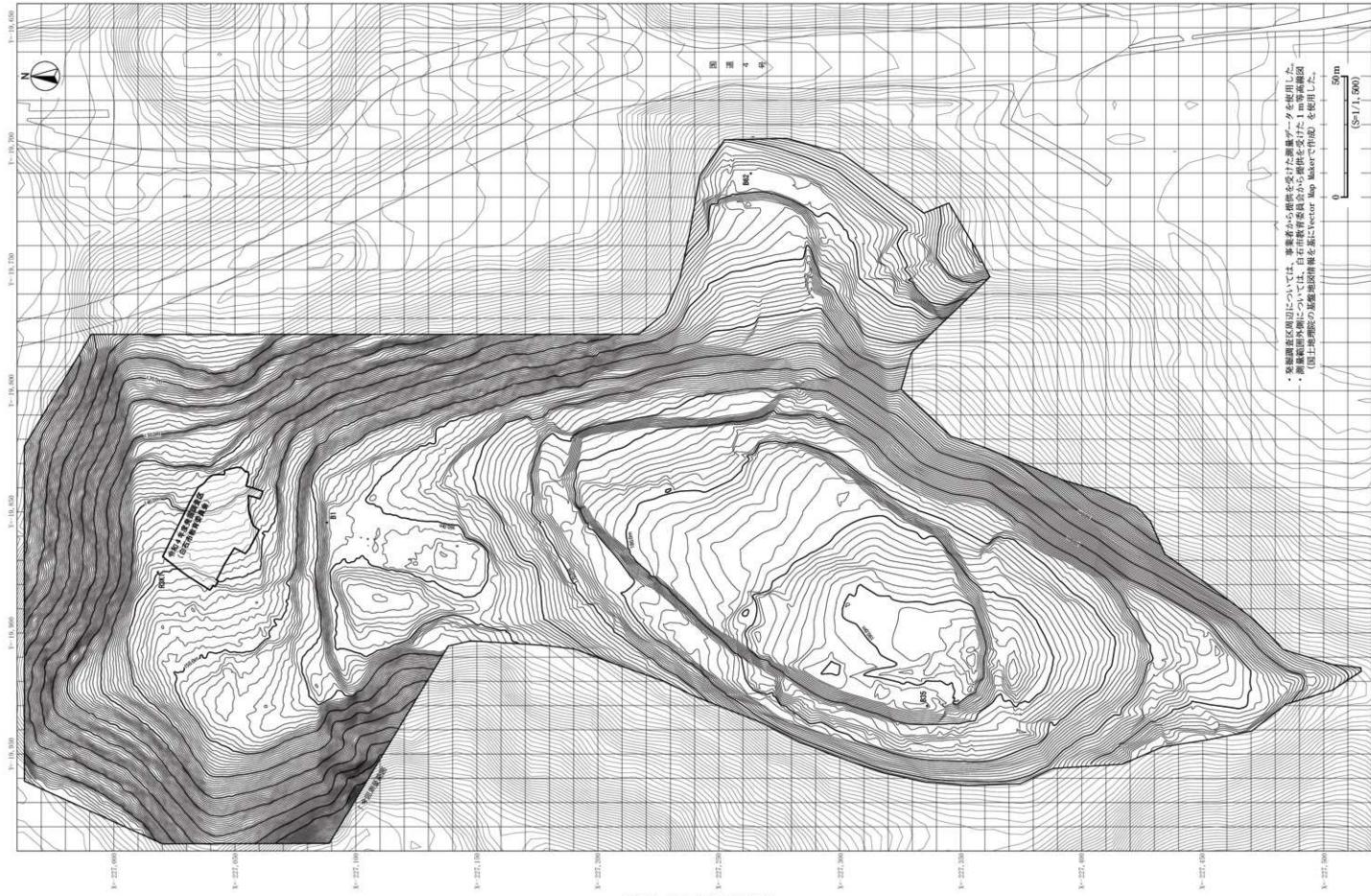
B35 X=-227,336.096 Y=-19,930.094 B62 X=-227,263.249 Y=-19,710.158

写真撮影には1,630万画素のデジタルカメラを使用した。

令和4年5月16日から26日に発掘調査対象地に近い北半部、11月9日から29日に残る南半部を測量した。地形測量作業終了後、50センチセンターで縮尺1/1,000の等高線図を作成し、それを下図として再度現地を踏査し、調査員間で議論しながら縄張を描画する作業を行った。現地調査は11月30日に終了した。

### 2. 遺構の概要

地形測量調査および現地踏査によって、地上顕在遺構の広がりが認められた馬牛館跡の範囲は、南北約430m、東西約250mである。最高所の標高は192mで、館跡東側の国道4号に面した説明板付近や、南側の馬牛沼との比高差は70mである。現況は山林で、雜木林や杉の人工林が広がっている。かつては主な平場が畠として利用されていたが、現在は耕作されておらず藪となっている。道は東側の平場を通るルートと、丘陵北東斜面を登って北側から入るルートがある。菊池利雄による図には「攝手道」として南の馬牛沼側から登るルートが示されているが、現在は草木が激しく繁茂していてたどることはできない。これとは別に、西の斎川側から斜面をつづら折りに登る道があるが、植林に伴う現代の作業道とみられる。馬牛館跡が立地する丘陵は、平場1が位置する丘陵頂部を中心に、北・東・



第3図 馬牛館跡地形測量図

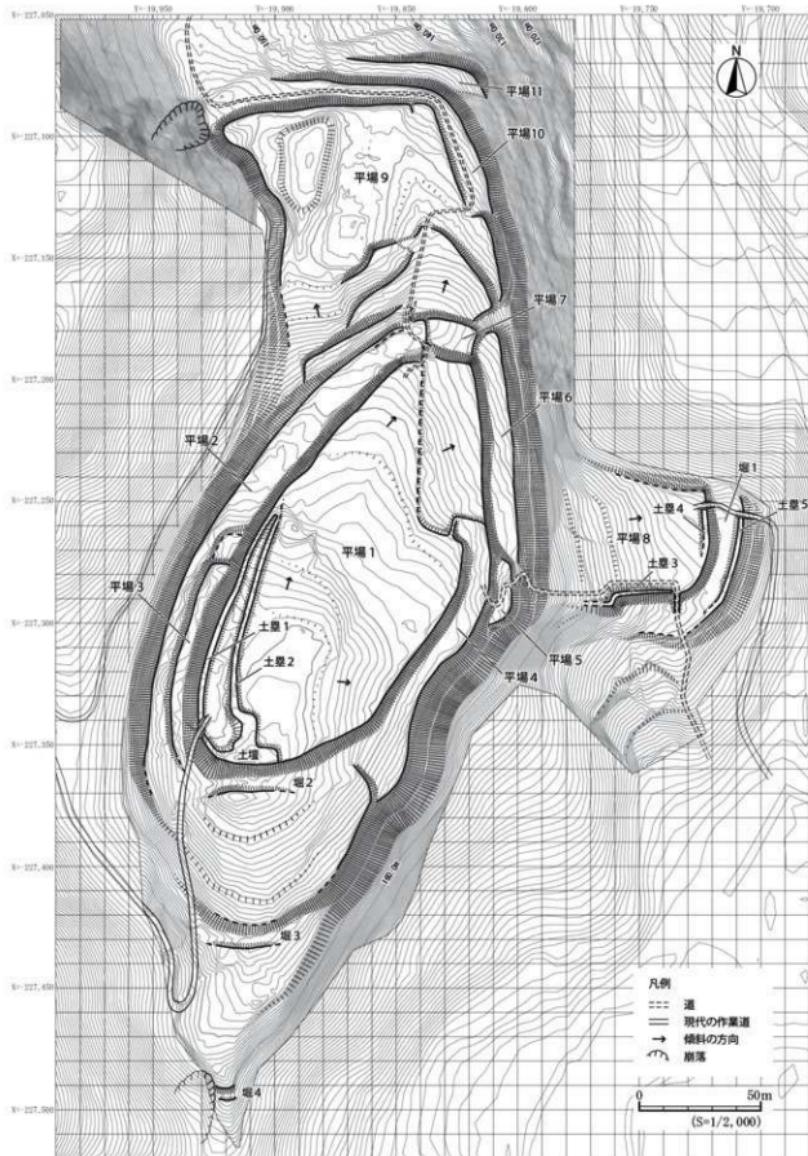
・査定団員の周辺については、事業者から地図を用意した。  
・査定団員外側については、自衛市教委から地図を受けた。  
・測量団の測量結果を基にVector Map Makerで作成。  
（国土土地院の電子基準点情報を基に）

Y=2271,600

50m

(S=1/1,500)





第4図 馬牛館跡縄張図

南に尾根が広がり、館跡の遺構が展開している。これに対して西の斎川側は急斜面や崖となっている。

地形測量と踏査によって確認した地上顕在遺構は、平場 11 箇所、土壙 5 条、堀 4 条である（第 3・4 図）。以下、その概要について説明する。

#### （1）平場

##### 【平場 1】

丘陵頂部に位置する。全体に南西から北東に向かって降る緩斜面となっており、最高所の南端部は標高 192 m、最も低い北東端部で標高 174 m である。全体の形状は楕円形で、南北約 190 m、東西幅約 82 m である。馬牛館跡で最も広い平場である。西辺の南半部に二重の土壙（土壙 1・2）があり、西辺中央から二股に分かれて南に延び、平場南端で土壙状の高まりに接続している。土壙状の高まりは、南北長約 20 m、東西長は北側が約 10 m、南側が約 20 m、高さは 0.5 ~ 0.7 m である。平場 1 と周囲を囲む帯状の平場（平場 2 ~ 7）との間は、高さ約 4 ~ 5.5 m 程の切岸となっている。平場北側の直線的な低い段差は、過去の航空写真等から後世の耕作等に伴い改変された部分と考えられる。

##### 【平場 2】

平場 1 の西側をめぐる長大な帯状の平場で、長さ約 210 m、幅約 10 ~ 13 m である。平場 1 との高低差は 5.0 ~ 5.5 m 程である。

##### 【平場 3】

平場 2 南半部の東側（平場 1 側）に位置する帯状の平場で、長さ約 78 m、幅約 4 m、平場 2 よりも高所にあり、高低差は約 2 ~ 3 m となっている。この平場 3 の北にも不明瞭な段がある。

##### 【平場 4】

平場 1 の南東に位置する帯状の平場で、長さ約 110 m、幅 7 ~ 9 m で、南端部が約 22 m に広がり、その南側の自然地形との間が高さ約 2.5 m の段となっている。平場 1 との高低差は 5 m 程である。

##### 【平場 5】

平場 4 の東側に位置する平場で、長さ約 13 m、幅約 5 m である。標高は平場 4 より低く、平場 6 より高い。平場 4 との高低差は約 3 m、平場 6 との高低差は約 2 m である。

##### 【平場 6】

曲輪 1 の北東に位置する帯状の平場で、長さ約 91 m、幅約 8 m である。平場 4・7 よりも標高が低く、平場 4 との高低差は約 4 ~ 5 m、平場 7 との高低差は約 2 m である。

##### 【平場 7】

平場 1 の北に位置する平場で、長さ約 18 m、幅約 10 m である。平場 1 との高低差は約 4 m、平場 2 に対してやや標高が低く、その高低差は約 0.5 m である。

##### 【平場 8】

丘陵東側に位置する。全体の形状は長方形で、東西約 64 m、南北約 42 m である。西から東に向かって降る斜面となっており、東側は緩斜面だが、西側は 20 度を超える急な斜面である。南東部には南側から登って平場内に入る土橋状の出入り口部がある。東辺と南辺に土壙がある。北側は急斜面の自然地形となっていて、土壙状の高まりは確認できない。

### 【平場9】

丘陵北側に位置する。全体の形状は長方形で、南北約85m、東西約80mである。平場内には東西両側に尾根状の地形があり、その間は谷状となるなど起伏が多い。南東部は尾根状地形を利用して、一段高い平場を形成している。東辺に平場10から入る出入り口部がある。平場9と外側の平場10との間の高低差は約3~4mである。

### 【平場10】

平場9の北側および東側をめぐる帯状の平場である。長さが東西約70mで、平場9の北東角で南北に折れ、南北約50mである。幅は約10~19mである。平場9との高低差は約3~4mである。

### 【平場11】

平場10の一段下外側（北側）にある帯状の平場で、長さが東西約50m、幅約11mである。平場10との高低差は高さ約3mとなっている。

### (2) 土壘

#### 【土壘1】

平場1西辺南側に位置する南北方向の土壘で、長さ約110m、上幅約1m、高さ約0.6mである。南端近くに開口部があるが、西麓から続く現代の作業道に接続しており、後世の改変の可能性がある。北側で土壘2と合流し、南側では平場1南端の土壌に接続する。

#### 【土壘2】

土壘1の東側に位置する南北方向の土壘で、長さ約80m、上幅約1.2m、高さ1~1.8mである。北側で土壘1と合流し、南側では平場1南端の土壌に接続する。

#### 【土壘3】

平場8の南辺に位置する東西方向の土壘で、長さ約33m、上幅約1m、高さは約0.8~1.5mで、南側（平場8外側）斜面裾部に対する高さは約3.6~3.8mとなっている。この土壘は西側で屈曲部を有する。この屈曲部から平場8南側にある土橋状の出入り口部までの距離は約27mである。

#### 【土壘4】

平場8の東辺に位置する南北方向の土壘で、長さ約25m、上幅約1.8~2.0m、高さは約0.6~1.0mで、東側の堀1底面に対する高さは約3.0~3.6mとなっている。この土壘4は南にゆくほど高さを減じ、平場8東辺の中ほどで消滅する。また、北側も現在の道によって一部断ち切られている。

#### 【土壘5】

土壘4・堀1と並行するように延びる南北方向の土壘で、長さ約40m、上幅約1.5m、空堀底面に対する高さは約0.3~0.4mである。土壘4同様、北側が道により一部断ち切られている。

### (3) 堀

#### 【堀1】

平場8東辺外側を囲うように延びる南北方向の堀である。長さ約55m、下幅約5mである。

#### 【堀2】

平場1南の外側に位置する東西方向の堀で、長さ約30m、上幅約13m、底面幅約5mである。

平場1南端土壇から堀2底面までの高さは約5m、堀2南側上端から底面までの高さは最も高い所で約2mである。

#### 【堀3】

堀2から南へ約65mの場所に位置する東西方向の堀で、長さ約25m、上幅約12m、底面幅約3mである。北側上端から底面までの高さは約3mである。

#### 【堀4】

堀3から南へ約63mの場所に位置する東西方向の堀で、長さ約5m、上幅約5m、底面幅約2mである。北側上端から底面までの高さは約1.5mである。

## 第4章 総 括

### (1) 馬牛館跡の構造について

馬牛館跡は標高192mの独立丘陵上に立地しており、今回の地形測量調査・現地踏査によって、丘陵頂部を中心に平場11箇所、土壙5条、堀4条の地上遺構を確認した。

丘陵頂部で最も広い平場1が主郭と考えられる。南北約190m、東西幅約82mの規模で、西辺南側に2条の土壙（土壙1・2）を伴う。平場1南端には土壙1・2に接続する土壇状の高まりがあり、その形状や、平場端部に位置し堀2やそれ以南の斜面を見下ろす位置にあることから、櫓台の可能性がある。また、平場1の周囲を平場2～7が囲む。幅が狭く細長い形状をしていることから帯曲輪と考えられる。また、平場1と平場2～7との間は高低差5mの急斜面（切岸）となっている。平場1から南の尾根上には堀2～4があり、尾根上のルートを遮断する堀切とみられる。

丘陵東側の平場8や丘陵北側の平場9は副郭と考えられる。平場8は南辺に屈曲部を有する土壙3、東辺に土壙4に囲まれ、さらにその外側に土壙5と横堀状の堀1が伴う。平場9は土壙等は確認できず、外側に幅の狭い平場10・11が伴う。

これら遺構の年代について、天文年間にこの地を領した桑折氏の城とする考えがあるが（菊池2000）、縄張りから年代を絞り込むことは難しく、ここでは中世と述べるに留めたい。

### (2) 馬牛館跡の特徴について

今回の調査で明らかになった馬牛館跡の特徴として、街道に面した地形狭隘部を押さえる交通の要衝に立地していること、館跡全体の規模が大きいこと、主郭・副郭の面積が広大であること、館跡全体の構造は東側に比較的多くの防衛的施設を配置していることの、4点が挙げられる。

館跡全体の規模は、南北約430m、東西約250mで、周辺の城館跡に比べかなり規模が大きい。松岡進が隣接する伊具地域の城館について規模・・比高をグラフ化しているが（松岡2015）、最大となる丸森町の冥護山館跡（南北約360m×東西約220m）と比較しても、馬牛館跡の規模が大きいことが分かる。

平場の面積は、主郭（平場1）が約12,000m<sup>2</sup>、副郭とみられる平場8・平場9はそれぞれ約2,600

m<sup>2</sup>、約7,500m<sup>2</sup>で、館跡全体の規模だけでなく、主郭・副郭の面積も広大である。

館跡全体の構造は、東に位置する平場8で東辺に土塁2条と堀1条、南辺に土塁1条を配し、さらに平場5、平場4を経なければ主郭（平場1）に達することができず、全体として東側を正面として複数の遺構が配置されているとみられる。平場8南辺の土塁3は屈曲部を有するが、これは曲輪の出入り口部等に接近する敵に対して、側面から弓矢等を射かけるための工夫である「横矢掛かり」であると考えられ、館跡東側の堅固さがうかがえる。これに対し館跡の南側は、尾根上に3本の堀切を配し、その内側にある平場1南端に櫓台が置かれるシンプルな構造となっている。尾根線を堀切で遮断し、その内側に櫓台が置かれる構造は、福島克彦が近畿地方の事例を中心に検討しており、自然地形を活用し土木量を抑制しつつ効果的な防御を形成するものと考えられている（福島2003）。

### （3）まとめ

- ・馬牛館跡は、宮城県南部、白石市斎川字館山に所在する。遺跡は白石盆地南端に位置し、街道に面した独立丘陵上、地形狭隘部を押さえる交通の要衝に立地する中世城館である。
- ・今回の地形測量調査は、送電鉄塔建設に伴い遺跡北部で実施される本発掘調査を契機とし、馬牛館跡の規模や構造の把握を目的に実施した。
- ・調査では平場11箇所・土塁5条・堀4条などの地上顕在遺構を確認した。
- ・馬牛館跡は中世の城館跡とみられ、全体の構造的特徴として、主郭・副郭の面積が広大であること、街道に面する東側に比較的多くの遺構を配置し堅固にしていることなどが認められた。

#### 引用・参考文献

- 菊池利雄 2000 「馬牛館と芭森小屋館」『郷土の研究』第30号
- 紫桃正隆 1973 『史料 仙台領内古城・館』第四巻 宝文堂
- 鈴木武夫 1975 『復刻版仙台叢書 封内風土記』第一巻
- 竹井英文 2021 「三沢城跡」「被・東北の名城を歩く南東北編」吉川弘文館
- 中橋彰吾 1987 「中世城館の規模と構造について」『白石市史』3の（3）
- 西殿継生 2004 「『横矢』の効用」『城館史料学』第2号
- 福島克彦 2003 「中世城館における櫓台の成立と展開」『城館史料学』創刊号
- 松岡進 1996 「城館跡類型論の試み」「六軒丁中世史研究」第4号
- 松岡進 1998 「伊達氏系城館論序説」「中世城郭研究」第12号
- 松岡進 2002 『戦国朝城館群の景観』校倉書房
- 松岡進 2015 『中世城郭の構張りと空間』吉川弘文館
- 宮城県 1885 『磐城國刈田郡誌』
- 宮城県教育委員会 1980a 「飯詰館跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書II」（宮城県文化財調査報告書第62集）
- 宮城県教育委員会 1980b 「地蔵院館跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書III」（宮城県文化財調査報告書第65集）
- 宮城県教育委員会 1980c 「湯ノ倉館跡」「東北自動車道遺跡調査報告書IV」（宮城県文化財調査報告書第71集）
- 宮城県史編纂委員会 1987 『宮城縣史』第32卷資料編III
- 潟原城跡発掘調査団 2018 『潟原城跡－第1次・2次発掘調査報告書－』（七ヶ宿町文化財調査報告書第5集）



1. 馬牛館跡遠景（南から）



2. 平場 8 東辺の土壙 4・5 と堀 1（北東から）



3. 平場 8 南辺の土壙 3 屈曲部（西から）



4. 平場 9 北側の切岸（西から）



5. 平場 4（北から）



6. 平場 1 西側の土壙 1・2（北から）



7. 平場 1 南側の堀 2（西から）



8. 堀 4（東から）

#### 写真図版 1 馬牛館跡と地上頭在遺構

## 報告書抄録

ふりがな	うしろざわみみなみいせき・ばぎゅうだてあと							
書名	後沢道南遺跡・馬牛館跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第257集							
編著者名	矢内雅之 黒田智章 村上景亮							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町 3-8-1 TEL: 022-211-3685 FAX: 022-211-3693							
発行年月日	西暦 2023年3月17日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
後沢道南遺跡	栗原市栗原町後沢 後沢道南	042137	41074	38度 44分 12秒	141度 2分 32秒	2020.11.04 ～ 2020.12.04	2,821m <sup>2</sup>	(仮称)栗原インターチェンジ整備事業
馬牛館跡	白石市斎川字船山	042064	02170	37度 57分 07秒	140度 36分 24秒	2022.5.16 ～ 2022.5.26 2022.11.9 ～ 2022.11.29	約 60,000 m <sup>2</sup>	遺跡範囲確認
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
後沢道南遺跡	集落跡	古代		竪穴遺構・柱穴・ピット		縄文土器 弥生土器 土師器		
馬牛館跡	城館	中世		平場・土塁・堀		地形測量調査		
要 約								
後沢道南遺跡	(仮称)栗原インターチェンジ整備事業に先立ち大天馬遺跡近接地の試掘調査を実施した結果、古代の竪穴建物跡 2棟、柱穴・ピット等を検出した。遺構検出箇所周辺を後沢道南遺跡として新規登録し、改めて令和3年度以降に本発掘調査を実施することになった。							
馬牛館跡	送電鉄塔建設工事に伴う馬牛館跡の本発掘調査を契機とし、館跡の規模や構造を把握するため、地形測量調査を実施し、平場・土塁・堀などの地上顕在遺構が確認された。規模が広大な館跡であり、主郭・副郭の面積も非常に広く、街道に面する東側に比較的多くの遺構を配置し堅固にしていること等が分かった。							

---

宮城県文化財調査報告書第 257 集

後沢道南遺跡・馬牛館跡

令和 5 年 3 月 15 日 印刷

令和 5 年 3 月 17 日 発行

発 行 宮 城 県 教 育 委 員 会  
仙台市青葉区本町三丁目 8 番 1 号

印 刷 株 式 会 社 東 誠 社  
仙台市宮城野区岡田西町 1 番 55 号

---